第75巻6号　令和5年6月1日発行（毎月1日発行）848号

跳龍（ちょうりゅう）

令和5年

6月号

曹洞宗大本山總持寺

諷経　参同契・寶鏡三昧行道

大本山總持寺　渡辺啓司監院

曹洞宗　服部秀世宗務総長

大本山永平寺の南澤道人禪師さまは御垂示で「太祖瑩山禪師さまは『たとい難値難遇の事有るとも、必ず和合和睦の思いを生ずべし』と、人々の悲しみも苦悩も我がことのように受け止め、相和して生きることをお説きです。自分のためだけではなく、社会と共に歩み、相手の幸せを自分の喜びとすることが出来るよう努めてまいりましょう」と、大遠忌をお迎えするにあたっての心構えをお説きになられました。

服部秀世宗務総長はご挨拶で、瑩山禪師が記された『洞谷記』の尽未来際置文にあります「師檀和合して、親しく水魚の昵をなし、来際一如にして、骨肉の思いを致すべし」を引用され、「今日の曹洞宗は、僧侶と檀信徒が血縁の間柄のように心を同じくし、ともに力を合わせて連綿として受け継ぎ伝えてまいりました。このみ教えをこの先も途絶えることなく、受け渡してまいります」との決意を語られました。

また、渡辺啓司監院は謝辞で「常々、石附周行紫雲臺猊下は、よく私たちへ『一味同心』という言葉をお示しになられます。これは『洞谷記』の中の『一味同心にして一大事となす』というお言葉です。瑩山禪師さまは道元禪師さまよりの正伝仏法をまさしく『相承』なされ、幾多の高弟を育て上げ、洞門の基を豊かに築かれました。そのみ教えの中で『和合和睦』の精神を何よりも尊重されました」と挨拶し、現在、全山一如で準備を進めております大遠忌の円成を期する覚悟を示しました。

江戸時代に造像された仏像の研究は作例の多さ故に研究の及ばぬ所が多く存在する。ところが地方を中心に近世の仏像で、思いもよらぬ名品が伝来していることがある。本像もそのひとつである。本像は明治時代に〝たばこ王〟とも呼ばれた村井吉兵衛旧蔵のコレクションの一部で、總持寺へと寄進された経緯を持つ。

我が国における四天王像は、古くは聖徳太子建立の四天王寺に遡るとされ、現存する最古の作例としては法隆寺金堂の四天王立像が挙げられる。大本山總持寺では、巨大な仁王像を祀る山門の楼上に当世風の四天王立像を安置している。一般の方の目に触れる機会がないため、總持寺に四天王像が存在することを知らない方も多いだろう。本稿では楼上の四天王像とはまた異なり、古様で表される宝蔵館収蔵の四天王像について紹介していく。